

人生選び直すチャンス

全米で400万部超のベストセラー

1となり、オバマ元大統領夫妻やビル・ゲイツ氏が絶賛した自伝。書いたのは、アイダホの山の中で、政府を悪と信じる一家に育ち、独学で大学に入学、ついには英ケンブリッジ大学で博士号を取得した女性である。こう書く「ペリギヤル」のアメリカ版のように聞こえるかもしれないが、主題は大学教育の効用というより、家族と虐待と独立の話である。

モルモン教に由来する父の宗教心は、西部の孤立した家族集団に時おり見られるように、公教育や近代医学を敵視する極端な陰謀論に転化している。Y2K(西暦2000年)問題を聖書に預言された終末と信じるあたりは、19世紀以来の新興キリスト教に典型的なパターンだが、神の国の到来をライフル銃と食料の備蓄で迎えようとするのは、現代のトランプ支持者にも通じるいかにもア

メリカ的な逸脱である。そのような家族の呪縛から、どのようにして抜け出し、自分の人生を切り開くことができたのか。彼女はインタビューで「どんな形の虐待も心を蝕む」と語っている。虐待は被害者に、自分が無価値な存在だと思込ませてしまうからである。

著者は、兄が開いてくれた教育へのわずかな機会を握んで必死にはい上がった。世界を理解する目が変われば、自己理解も変わり、自分の尊厳を守ることも自覚めてゆく。そして彼女は書いた。自分の物語を書くことは、傷を癒やし、自分を傷つけた相手を理解し直すことにつながるからだ。

だが、それで万事がめでたく解決したわけではない。支配者は従属者の覚醒を喜ばず、家族の恥を晒した裏切り者を許さない。本書が出版されると、関わりのある親族は異論を唱え、母は自己弁護のために対抗本を自费出版した。家族は今なお分断されたままである。

それでもいい、と著者は言う。同じような境遇にある誰かが、新しく人生を選び直すチャンスになるならば。彼女はそれを教育と呼ぶ。

(森本あんり・国際基督教大教授)

エデュケーション

タラ・ウェストバー著、村井理子訳(早川書房・2420円)



文化史的「読み」を実演

本書は2部構成になっている。表題にもなっている「アリスに驚け」という書き下ろし評論が第1部で、第2部には2013年以降に書かれた12編のエッセー・評論が収録されている。これに「ヴァンダーシユラン

分(絵も会話もない本なんて何になるの」と、アリスは思いました)から読み解いていくのだが、なんと冒頭の2文だけで14頁を費やし、全123頁で解説し終わるのはウサギの穴のなかを落下する部分までなの

TARA WESTOVER 1986年米アイダホ州生まれ、歴史家、エッセイスト。英ケンブリッジ大で歴史学の博士号を取得後、米ハーバード大公共政策大学院で上級研究員を務める。